

月刊 民族学 3月号

2025



特集 民具の旅学

巻頭エッセイ
瀬戸山玄

冷蔵庫へのまなざし

瀬戸山 玄

ドキュメンタリスト・記録家

プロフィール
1953年鹿児島生まれ。早稲田大学文学部卒業。映像制作会社勤務後フリー写真家に。代表作『東京ゴミ袋』(文藝春秋)、『里海に暮らす』『狙撃手、前へ!—ある父島移民の戦争』(岩波書店)、『野菜の時代—東京オーガニック伝』(NHK出版)、『世のなか食のなか』(アノニマススタジオ)。2000年記録家宣言。岩崎書店「伝統工芸の名人に会いに行く」全6巻担当。文体探求塾主宰。

発端

端は、一八歳の時に読んだ人類学者オスカー・ルイスの『貧困の文化』だったと思う。メキシコ市のスラムに暮らす貧困家庭を記録した労作は冷蔵庫普及率四パーセントという生活がいかに家事を煩わしくし、日になんども牛乳を買い足しに走る妻の大変さを明かしていた。しかも天井裏から男女の諍いまで覗くような文体の臨場感。その記憶を引きずりつつ、自分初のフィールドワークとして東京に住む地方出身の独身女性を訪ねて肖像写真を撮るシリーズに着手した。訪問先では冷蔵庫の中を見せて下さいと必ずお願いし、大半は快諾したけれど食生活の公開を頑なに拒む方もいた。八〇年代には息のあう雑誌編集者と共に都会の路上生活者即ち冷蔵庫と無縁な人々の持ち物調べを行い、そのユニークさに驚かされた。さる男性五十代は結婚歴あり浮浪歴五年の猛者で、大きな紙袋からは賞味期限切れオニギリ類と一緒に大切な帳面が現れ、前に入院先で出された病院食の献立が細かく記述されていた。毎日、廃棄食品で命を繋いでもバランスの良い食事を心がけようと知恵を絞っていたのだった。

九〇年代には犯罪人類学を提唱する故朝倉喬司さんと東京地裁の法廷見学に時々通い、ある帰りに氏の導きで日比谷公園の東屋に住む怪しき御仁を訪ねた。その元左官親方は初秋の黄昏が深まるとカップ酒と一緒に小女子と練り物一品を勧めてくれた。当然冷蔵庫はなく素性の知れぬ肴と食中毒の季節だ。一瞬のためらいを見透かされてしまい、「大丈夫だよ、これ築地で働く客からの差し入れだ」と安心させた。それから一時間ばかり電池ランタンの下でキャンプ風な酒盛りを楽しんだ。

実はこの方、熱愛盛んな日比谷公園に夜な夜な集まる覗き愛好者らに欠かせない黒装束と靴を預かる商いを考案。そこには霞ヶ関役人から築地市場で働く者までいて新鮮な差入れ品をあれやこれや折々よく貰うのだとか。

彼らは一九九三年東京サミット開催と某事件を機に日比谷からその後一掃されてしまうのだが、二〇一一年の東日本大震災による食糧難パニックは、都市生活の命脈がコンビニという代理保冷庫に支えられている日本の実像を突きつけた。冷蔵の深化は更に続く。厄災から四年後の春に母が九五歳で他界し都内のモダンな斎場で通夜が営まれた。亡骸は美貌を保つアクリル半円筒に安置され、中を撰氏〇度に保つ小さな冷却器が繋がれているではないか。泉下の人まで冷風で涼むとは! 誰かが「冷蔵庫の文化史」なる本をばちばち著すべき好機なのかもしれない。

月刊 みんなの 2025年 3月号

表紙
背負って運ぶアメリカ先住民の水かごは、見た目以上に軽い。かごには粘土と樹脂が塗られており、水もれを防いでいる(EEM625014)

*本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

- 巻頭エッセイ
冷蔵庫へのまなざし
瀬戸山 玄
特集 民具の旅学
- 民具は博物館を旅する
日高 真吾
- 宮本常一の旅とムサビ・コレクション
加藤 幸治
- 万博資料収集団の旅のつづき
野林 厚志
- これから旅する民具たち
宮前 知佐子
- 集めてみました「旅行に便利な民具たち」
丸川 雄三
- みんなく回覧板
- 推しコレ図鑑
かわいさと、畏ろしさと、ジャガンナート
菅瀬 晶子
- ふらりミュージアム
テルメズ考古学博物館
黒田 賢治
- 世界の「乗っちゃえ!」
ロシアは広すぎる
藤原 潤子
- だって調査だもの
おなかと背中がくつつきながら
工藤 さくら
- ぱくっ!とフィルめし
とまらないラムヤイ
小川 絵美子
- 今月号の地図・編集後記

民具の旅学

旅するミンゾク学者が出逢ったのは
どこにでもいそうでない人たち
どこにでもありそうでないモノたち。
民具と名づけられたそのモノたちは
博物館にやってきて新たに出逢い
また新たな旅をはじめ。

みんなく創設50周年記念特別展
民具のミカタ博覧会——見つけて、みつめて、知恵の素
場所：特別展示館
会期：2025年3月20日(木)～6月3日(火)



民具は博物館を旅する

「民具」と名付けられたもの

民具って、なんだろう。
これを「我々の同胞が日常生活の必要から技術的につくりだした身近卑近の道具」と最初に定義したのは、一万円札で馴染みになった洪沢栄一しほさわ けいいちの孫、洪沢敬三しほさわ けいぞう（一八九六～一九九三年）（以下、洪沢）である。こう定義したうえで洪沢は、私設博物館「アチック・ミュージアム」を主宰し、全国各地の民具を広く収集した。アチック・ミュージアムの活動が発展するなかで、洪沢は一九三五年に白鳥庫吉しろとり くらきち（一八六五～一九四二年）らとともに日本民族学会を設立した。さらに一九三七年にはアチック・ミュージアムに収蔵していた民具など約二万点を日本民族学会に寄贈し、日本民族学会附属民族学博物館を東京都保谷市ほぐや（現西東京市）に設立。これらの資料は文部省史料館に移管された後一九七五年、その前年に創設されたばかりの国立民族学博物館（民博）が「アチック・ミュージアム・コレクション」として受け入れた。現在もその一部は日本の文化展示場の東北地方のくらし「こけしの産地」のコーナーに展示されているので、ぜひご覧いただきたい。週れば民博創設も、日本民族学会設立期に、洪沢が国立の民族学博物館設立を陳情していたのがきっかけであった。このように概観すると、多くの研究者が全国を旅して収集した民具は、研究資料としてアチック・ミュージアムのコレクションとなったのち、日本民族学会附属民族学博物館、文部省史料館、そして民博へと旅してきたことがわかる。

ひだかしんご
日高真吾 民博教授



洪沢敬三。新潟県湯之谷村にて（1936年、神奈川大学日本常民文化研究所提供）



津軽系 南部系 鳴子系 弥治郎系

人形（こけし）
（左からH0026116、H0026188、H0014155、H0026286）

のもとへと収蔵資料がいつでも旅立てる環境を整えている。

「同様で同等」ゆえに

アチック・ミュージアムの活動は、その後、日本全国の博物館や郷土資料館のモデルとなり、各県、各市町村の暮らしの文化を地域で伝える役割を担っている。なお、こうした活動では、地域の暮らしの文化を理解するために、「同様で同等」の民具が多数収集される。それらは一見、同じものが単に集められているだけに見えるが、そうではない。例えば、田畑の耕作で欠かせない「鋤」くわ。これらの鋤を複数並べて見てみると、刃の長さや角度、柄の長さの違いを観察することができる。これらの違いは、耕作地の広さや、平野部なのか、山間部なのかなどの環境によるものであり、まさに使用者の「知恵の素」が凝縮されているのである。工夫して改良を重ねた結果である。

このように、個々の民具には、それぞれの特徴や使っていた人びとの記憶や知恵が内在している。博物館へと旅してきた「同様で同等」の民具を「みつめて」、「知恵の素」を探ってみよう。それが民具の旅学なのである。

日本民族学協会附属民族学博物館
（保谷民博）人物／資料データベース
<https://ifm.minpaku.ac.jp/hoya/>



ツボテガ
（東京都 八丈島、H0026543）

トーバ
（鹿児島県 諏訪之瀬島、H0016619）

まんのおくわ
萬能鋤
（福島県、H0016830）

テグワ
（広島県、H0019447）

はちがたくわ
撥形鋤
（長野県、H0026853）



東北地方のくらし「こけしの産地」の展示
（東アジア（日本の文化）展示場、2024年）

右上：民具が並ぶアチック・ミュージアム内部（撮影年不明、神奈川大学日本常民文化研究所提供）
H、EEMからはじまる番号は本館の標本資料番号です。

宮本常一の旅とムサビ・コレクション

かとう こうじ
加藤 幸治 武蔵野美術大学 教授

宮本常一と若者たちの旅

民具研究は、戦前に渋沢敬三が主宰したアチック・ミュージアムが、日本の常民文化研究の資料として着目し、全国規模で呼びかけて標本資料収集をしたことに始まる。そのコレクションは、後に国立民族学博物館の基幹コレクションのひとつとなった。そのアチック・ミュージアムの諸活動にかかわり、戦後も日本全国を歩き続けた民俗学者宮本常一は、晩年に教鞭をとった武蔵野美術大学の生活文化研究会（一九六六年発足）と近畿日本ツーリスト日本観光文化研究所（一九六六～八九年。以下、観文研）を率いた。どちらも美大生をはじめとする当時の若者たちとともに、フィールドワークと民具収集によって日本文化の多様性に光を当てる活動を精力的におこなった。

観文研の雑誌『あるくみるさく』（一九六七～八八年、全一六三号）は、毎月ひとつの展示では、博物館の学芸員がおこなう「熟覧」と、美大生が得手とするスケッチやデッサンを組み合わせ、それぞれが「知恵の素」を探って共有するワークショップを実践している。

現代の美大生たちが、かつて若者が旅によって収集した民具から創作のアイデアを見出さず、それをきっかけに、自身の

特集を設定し、観文研の所員や同人の若者たちによるフィールドワークをもとに地域の生活文化の視点を伝えるメディアであった。定番の目的地を効率よく巡る団体旅行の全盛期にあつて、土地の人にはあたりまえと思えるような文化の魅力を、自分の足で歩いて掘り起こし、それを広く共有していくような「より良い旅」の文化の普及を目指したのである。

観文研が収集した民具は、陶磁器・竹細工・染織品などを軸とし、そこに写真家園部澄の膨大な郷土玩具コレクションも加わった。最終的には一九七五年を目標に計画された民族文化博物館の展示資料となるはずであったが、博物館建設はオイルショックなどの影響から未完に終わった。民具はその後、武蔵野美術大学に寄贈され、収集の継続によって九万点におよぶ日本屈指のコレクションが形成された。それがムサビ・コレクションである。

観文研が収集した民具から創作のアイデアを見出さず、それをきっかけに、自身の

フィールドワークに出かけ、作品制作やデザインの糧としていく。過去の人びとの自然の素材への理解と、それぞれの目的に合わせて創出された暮らしの造形は、まさに「デザイナーなしのデザイン」といえる。単体では古道具にすぎない民具は、コレクションを形成することで生活文化の造形アーカイブとなり、身体の延長にある労働や動作のインデックスとなる。民具は地域の歴史・民俗資料であるにとどまらず、美術制作のヒントもそこに詰まっているのである。

デザイナーなしのデザイン

ムサビ・コレクションは、授業期間中の週二日、美術・デザインを学ぶ学生たちが自由に民具を閲覧できるよう、収蔵庫公開をおこなっている。民具の魅力は、実物をよく観察し、可能であれば手にとってこそ見出だすことができる。いくつかの授業や



民具展示での授業風景（東京都小平市、2022年）



まいわい 万祝着（ムサビ・コレクション）
万祝着とよぶ房総半島の大漁祝着。「祭魚洞（さいぎょどう）」という渋沢敬三の号が記されており、収集地は「東京都港区」とあるので渋沢邸で宮本常一が受け取ったと推測される



右：学生も参加しての資料整理作業（東京都小平市、2022年）
左：学生によるスケッチ（東京都小平市、2022年）





収集された仮面と対面する岡本太郎(右)(1969年、株式会社現代芸術研究所提供)

万博資料収集団の旅のつぶやき

野林厚志 のばやしあつし
民博教授

太陽の塔からやってきた

一九七〇年に開催された大阪万博のテーマ館であった太陽の塔の内部に展示する民族資料の収集が、一九六八年九月から約一年かけておこなわれた。これを担ったのが「日本万国博覧会世界民族資料収集団(通称EEM)」であった。

収集の対象となったのは四七の国と地域である。「日本」「韓国」「台湾」「東南アジア」「インド・中近東」「東アフリカ」「西アフリカ」「ヨーロッパ」「中南米」「北米」「オセアニア」に収集地域が区分された。大陸中国やソヴィエト連邦(当時)がそれに含まれていなかったことは、当時の外交状況を如実に反映している。収集された資料はおよそ二五五〇件で、その大半が民博に今も収蔵されている。

数万キロの急ぎ旅

「インド・中近東」を担当した高山龍三は、その旅を次のように回想している。「収集旅行では公用旅券を用い、あらかじめ訪問する国々の査証を日本で取得して行った。一筆書きの航空券を事前に買い求めており、空港に着くと航空会社のカウンターで次の出発便の予約を入れ、ついでにホテルをとってもらった。現地ではまず博物館へ行って収集すべき資料のイメージを作り、おもに都会の古道具屋などでそれに準じたものを購入した。」(野林厚志編『国立民族学博物館開館40周年記念特別展 太陽の塔からみんぱくへ——70年万博収集資料』七四頁)

「オセアニア」を担当した石毛直道と松原正毅は約四カ月で約五万五〇〇〇キロメートル(推定)を移動した。一日に単純に換算しても約四六〇キロメートルである。飛

行機、船、自動車、動物、徒歩とあらゆる手段を用いて、空、海、川、道路、そして道なき道を、自分たちの荷物、収集資料、収集費用をたずさえて、収集団は世界中を駆け抜けた。関連アーカイブを調べても当時の写真があまりないのは、忙しくて写真なんて撮っている暇がなかったからであろう。

「貧乏旅行」!?

『EEM日本万国博覧会民族資料調査集団(1968-1969) 記録』のなかに、各収集者が

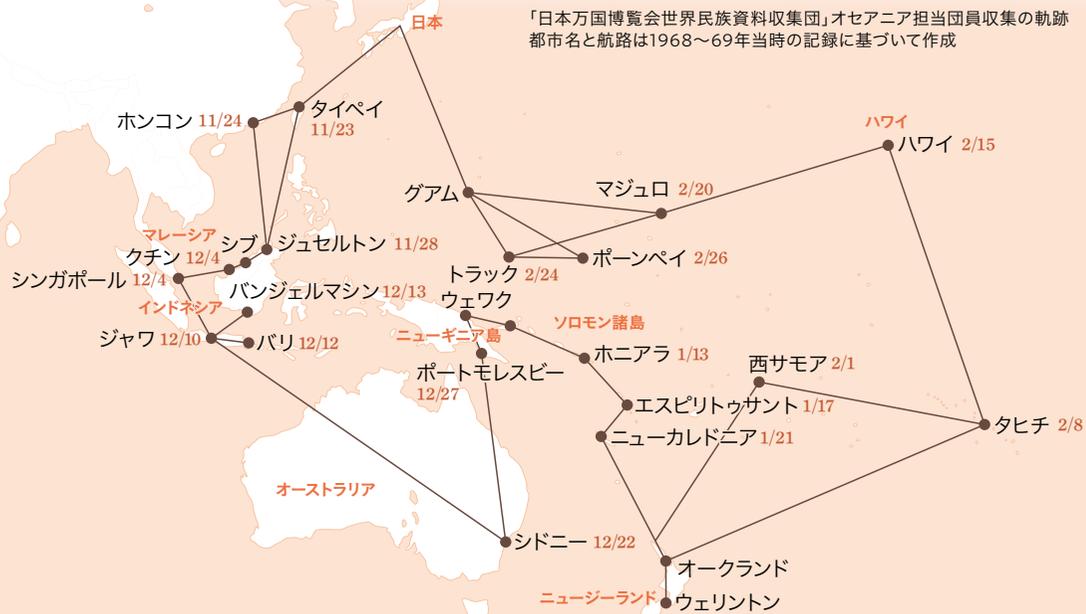
旅する筆まめたち

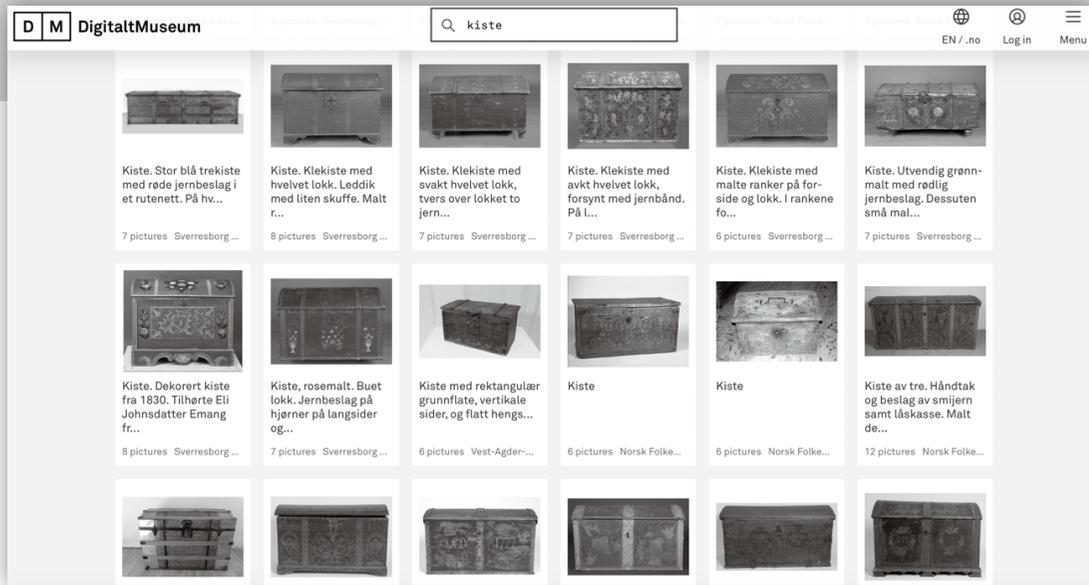
旅先から送った手紙がまとめられている。現地での経験、そこから湧き上がる感情がしたためられた文面から「異文同音」に伝わってくるのは、「忙しい、金がない」である。収集予算は約六〇〇万円、一ドルはじつに三六〇円だった時代である。旅費、運送費、資料収集費(仮面、神像、その他)にあてられた予算は収集終了時には数百円しか残っていないかったと記録に残っている。

旅人たちは収集団を統括していた梅棹忠夫、そして日本で事務局の任にあった吉田集而に宛てた手紙に旅の記録をしたためて送った。金の無心や愚痴、ときには日本で待機する吉田を羨ましがらせそうな内容も含まれている。今、そこで、何が起こって、何を感じ、考えたのかを伝える行為は、まさしく現代のSNS上にあふれている旅の投稿の先取りではないか。旅の経験を伝えたいという人間の欲求は、時代を変えても同じなのかもしれない。



上から
カヴァ用木鉢(サモア アビア地方、EEM245003)
仮面(ニューギニア、EEM212021)
人形(ニューギニア、EEM219001)





デジタル空間で再会した「箱」の仲間たち。ノルウェーの文化資源のプラットフォームで「kiste」と検索。今後、民博のデータベースとも連携させたい
 出典: <https://digitaltmuseum.no/search/?q=kiste&o=0&n=108> [2025年1月10日閲覧]

これから旅する民具たち

みやまえ ちさこ
 宮前知佐子

民博助教

現役引退後は、旅を

慣れ親しんだ地から遠い道の手を離れて、はるばる民博まで旅してきた民具たち。果たして、ここが旅の終着点なのだろうか。それぞれの風土に根づき、その必要性から製作・使用された道具が民具である。使い込まれた道具たちは、物理的な距離もさる



写真1
 衣装箱
 ノルウェーから民博にたどり着いた「箱」。現在は収蔵庫に保管されている(H0100513)

ことながら、長い時間をかけて民博までたどり着いた。そしてわたしたちはこの場で、さまざまな表情をみせる民具を享受し、異文化に想いを馳せることができる。博物館に収蔵されることになった民具は、日常のツールとしての役目を終え、第二の人生を過ごす。現地の文化から切り離され、本来の機能を発揮することのない民具は、どこか寂しそうにも見える。

——そのような民具たちに、もう一度旅へ出てもらおう。現役を退いた民具は、少々くたびれているのも確かである。そう簡単には旅立てない。しかし、そう、今は「デジタル」の時代。デジタルの力を借りれば再出発が実現するかもしれない。

デジタル空間に国境はない。筆者は「民博所蔵北欧の日用品に関するデータベース構築〜デザインの見点から〜」というプロジェクトを今年度、始動した。そこで目指したのは、日用品、まさに、民具が主役となっ

てデジタルな旅をすること。
 写真1の「箱」は、ここで扱う資料のひとつである。ノルウェーから来た収蔵品で、「衣装箱」という味気ないタイトルと、「衣類など、いろいろな物を保存するのに使用する」とだけ、記されている。誰が、どのように使っていたのであろう。「行李」との共通点はあるのだろうか。情報が少ない分、想像も無限大。一方で、「未知の文化」を知りたくなる。好奇心をかき立てられた研究者は、ソースコミュニティとよばれる「箱」のふるさとへ赴き、見聞を広げてきた。そこで筆者はこの「箱」の仲間を見つめることに成功。見つけた仲間は、ハンドメイドの一点物で、現所有者の母が一八歳だった一九五五年のクリスマスに、プレゼントとして受け取ったのだという。母が身の回りの物を収納していたときの思い出を語ってくれた。

懐かしい再会、新たな出会い
 さて、民具のふるさとに直接足を運ぶの



収納用品としての機能を果たすだけでなく、現代風のインテリアのアクセントとして飾られている
 (ノルウェー オスロ、2024年、グン・インゲル撮影)



ノルウェーの一般家庭で見つけた「箱」の仲間
 (ノルウェー オスロ、2024年、個人蔵、グン・インゲル撮影)

も楽しいけれど、じつは北欧地域はデジタル先進国として評価が高い。「箱」のふるさとノルウェーでも、キャッシュレス社会の実現をはじめ、社会全体のデジタル化が進み、文化資源も例外ではない。この国には、DigitaltMuseumという文化資源の大規模なプラットフォームが存在する。そこに「箱」をあらわすノルウェー語「kiste」と入力してみる。すると、「箱」の仲間たちがざらり、こうしてデジタル空間を利用すれば、民具は、ただ旅に出るだけでなく、懐かしい仲間と再会し、多くのストーリーをお土産として持ち帰ってこられるだろう。

とはいえ、シームレスに見えるデジタルの世界にもさまざまな壁がある。それらを乗り越え、民具の懐かしい再会や新たな出会いを来館者の皆さんとともに参加・体験できる仕掛けを、特別展「民具のミカタ博覧会——見つけて、みつめて、知恵の素」のなかに用意した。国境を超えたデジタルな旅先で民具たちを待ち受けているのは研究者や仲間たちだけではない。皆さんの目に留まったとき、それも、ワクワクする出会いである。少しのあいだ、展示場で、旅のおともをしてみませんか。

集めてみました 「旅行に便利な民具たち」

まるかわ ゆうぞう
丸川 雄三 民博 教授

携帯用かまど
モンゴル

旅行用のかまど。狩猟の際などに持ち運んだと思われる。小ぶりできろく、煙突部分は外すことができる(H0205556)



発火道具(携帯用)

中華人民共和国 内モンゴル自治区
携帯用の火打ち金。装飾が施されており、片面に小さな石が入る収納部がある。男性の正装に欠かせない持ち物である(H0021919)



腰帯
台湾

パイプの人びとが狩猟の際に用いていた腰帯。きつく締め付けることで体幹が安定し、長時間の歩行が可能となる(H0176265)



航海旅行用物入れ
イギリス

世界をめぐる定期船に乗る旅行者たちが、19世紀後半に使っていたもの。大きさのわりに軽く、内側は紙張りになっている。現代のスーツケースに近い(H0081664)



寝袋
ロシア

西シベリアを流れるケチ川流域で使用されていたもの。トナカイの毛皮でつくられており、防寒性に優れる(H0088529)



水入れ容器
南アフリカ共和国

先住民が長旅に用いていたひょうたんの水入れ。ビーズで装飾された網に包まれ、とても軽い(H0232914)



首飾り
イラン

明るいターコイズブルーの装身具は、魔除けとして旅行の際のお守りにも用いられてきた(モハンマド・サーダートマンド製作、H0224015)

菅笠
日本

雨や雪をしのぐかぶりものとして、菅笠は江戸時代から明治初期の旅によく使われていた。しっかりした作りでありながら、とても軽い(H0032186)



タリスマン
ポリビア

「家内安全、旅行無事などの祈願のために用いる」用具のひとつ。手のひらにすっぽりと収まるほどの大きさで、表面はとてもなめらか(H0133172)



鞍掛け袋
アルゼンチン

袋が両側についた振り分け式の荷物入れ。馬やロバなどで旅行をする際に使用する。人が肩に掛けたり、手に提げたりすることもあるそうだ(H0132796)

みんなく 回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内
<https://www.minpaku.ac.jp/event/>



各イベントについて、
詳しくはホームページを
ご覧ください。

みんなく創設50周年記念特別展 民具のミカタ博覧会

本特別展では、日常の生活で必要なものとしてつくられ、使用されてきた民具について、くらしのなかの美の造形として紹介します。
会期 3月20日(木)～6月3日(火)
会場 特別展示館



枕／椅子 ソマリア

■関連イベント
公開シンポジウム
コレクシヨンの系譜学
日時 3月30日(日)13時20分～16時
25分(12時30分開場)
会場 本館2階第5セミナー室

鼎談 イサイアス・ヒメネス、山本正宏
(LABAVA)、鈴木紀
主催 国立民族学博物館、科研基盤
(B)、鈴木紀「ラテンアメリカの民衆芸術に関する文化人類学的研究」(2024-2025.3)
【申込期間】3月10日(月)まで
※事前申込制、先着順、参加無料
※詳細は二次元コード
(QR)からご確認ください。
お問い合わせ先
motoi@minpaku.ac.jp

フォーラム型プロジェクト
データベースを公開！
■フォーラム型情報ミュージアム
プロジェクトデータベース
「アフリカの物質文化」
<https://fm.minpaku.ac.jp/africanMaterialCulture/>

共催イベント
いま、中東世界で何が起きているのか？
——前・駐レバノン大使に聞く
日時 3月22日(土)
13時30分～16時(13時開場)
会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
みんなくインテリジェントホール(講堂)(定員350名)
主催 N-HUGグローバル地域研究推進事業「グローバル地中海地域研究」
共催 国立民族学博物館
公益財団法人千里文化財団
【申込期間】3月14日(金)まで
※事前申込制、先着順、参加無料
※詳細は二次元コード
(QR)からご確認ください。
お問い合わせ先
おんい合わせ先
友の会事務局千里文化財団
minpakutomo@senri-f.or.jp

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
参加無料、申込不要(定員400名)

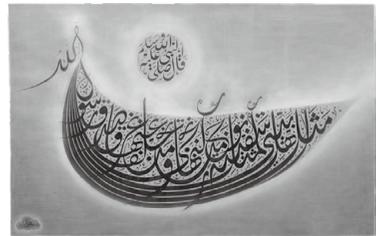
第555回
3月15日(土)13時30分～15時(13時開場)
「知のフォーラム」をめざした博物館づくり
——みんなくとの50年、みんなくでの37年

講師 吉田憲司(本館 館長)
私と民博との関わりは、はじめて足を踏み入れてから50年、着任から37年になります。その間、多くの時間を「知のフォーラム」をめざした博物館づくりに費やしてきたような気がします。私の研究の軌跡を振り返ります。

第556回
4月19日(土)13時30分～15時(13時開場)
本田孝一の書と宇宙
講師 本田孝一(アラビア書道家)
相島葉月(本館 准教授)

日本におけるアラビア書道の第一人者である本田孝一先生をお迎えして、このアートの

魅力について語り合います。本企画展のために制作した作品や道具の解説とともに、筆遣いも披露して頂きます。



本田孝一作「青の方舟」(2023年)

みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

会場 本館展示場(ナビひろば)
※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、要展示観覧券(一般580円、イベント参加費は不要)

3月9日(日)14時30分～15時15分
世界の文字をたった45分で!?
話者 吉岡乾(本館 准教授)

3月23日(日)14時30分～15時30分
ハサン・マスウーディーのフランス——抽象画と日本書道の間で
話者 鈴木慈子(兵庫県立美術館 学芸員)
相島葉月(本館 准教授)

3月30日(日)14時30分～15時
アボリジニのデジタル世界
話者 平野智佳子(本館 准教授)

本の紹介

野林厚志 編著
『現代「間食」考——狭間からみる人類の食』
平凡社 3,300円(税込)

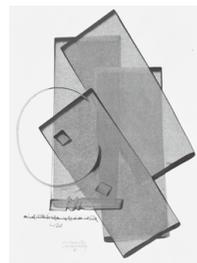
「間食」とは何か? 霊長類学、民俗学、文化人類学、心理学、栄養疫学などの多角的視点から、間食の起源と歴史、現代社会における意味を考察します。間食という日常的な行為から人間の食の本質に迫ります。



公開シンポジウム
Doings TSUNECHI『忘れられた日本人』を読み直す
日時 4月13日(日)13時20分～16時
25分(12時30分開場)
会場 本館2階第5セミナー室(定員50名)
講師 加藤幸治(武蔵野美術大学 教授)
神野善治(日本民具学会 会長、武蔵野美術大学 名誉教授)
川村清志(国立歴史民俗博物館 准教授)
日高真吾(本館 教授)
西まどか(編集者)
参加費 無料(展示をご覧になる場合は展示観覧券が必要)
【申込期間】3月24日(月)まで
※事前申込制、先着順
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます。(定員450名)
※詳細は二次元コード
(QR)からご確認ください。
お問い合わせ先



みんなく創設50周年記念企画展
点と線の美学——アラビア書道の軌跡
日時 3月29日(土)～4月11日(金)
※事前申込制、先着順
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます。(定員450名)
※詳細は二次元コード
(QR)からご確認ください。
お問い合わせ先



ハサン・マスウーディー作「人」1996年

友の会 講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先 国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)

電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会講演会

参加形式: 会場もしくはオンライン配信
友の会会員: 無料
一般(会場参加のみ): 500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第558回 3月1日(土)13時30分～15時
布のオーセンティシティは誰が決めるのか
——インドの染色品アジュラクとその職人
講師 金谷美和
(国際ファッション専門職大学 教授)
会場 本館2階第5セミナー室(定員70名)

第559回 4月5日(土)13時30分～15時
「民具のミカタ博覧会——見つけて、みつけて、知恵の素」の展示を概観する
講師 日高真吾(本館 教授)
会場 本館2階第5セミナー室(定員70名)
民具を見ると、日常の暮らしのなかで人びとが育んできた自然観や世界観にふれることができます。特別展「民具のミカタ博覧会——見つけて、みつけて、知恵の素」はこうした民具の魅力をさまざまなミカタから引き出すことを目的としました。そこで、本講演では特別展の展示内容について、その全容を解説します。

第89回 体験セミナー
美大生企画
「民具のミカタ・ワークショップ」
民具をじっくり観察するワークショップをとおして、民俗資料の魅力に迫ります。特別展関連企画です。
日程 5月31日(土)13時30分～15時30分
講師 加藤幸治(武蔵野美術大学 教授)
武蔵野美術大学 学芸員課程在学学生
会場 武蔵野美術大学 民俗資料室(東京都 小平市)
共催 武蔵野美術大学 美術館 図書館
【申込期間】4月30日(水)まで(事前申込制)

みんなくミュージアムパートナーズ(MMP)のワークショップ
点字体験ワークショップ
日時 3月8日(土)、4月12日(土)
12時～15時30分(最終受付15時)
会場 本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付
公開講演会
不安の時代——若き人びとの心のゆくえ
不安の時代を生きる若年層。グローバルな状況を経験しつつ、ローカルな人類の実践に目を向け、不安をめぐる多様な視点とアプローチを模索



アラビア書道の道具(エジプト、2023年)

会場 本館2階第3セミナー室、企画展示場(定員各回10名)
講師 山岡幸一(日本アラビア書道協会 事務局長)
相島葉月(本館 准教授)
対象 中学生以上を推奨
参加費 500円(大学生、一般の参加者は要展示観覧券)
【申込期間】2月28日(金)10時～3月16日(日)16時
※事前申込制(抽選ののち、3月21日(金)までに抽選結果を通知)。1回につき1名の応募が可能。

ワークショップ
メキシコ動物木彫の世界——カラフルな民衆芸術はいかに発展してきたか
メキシコの木彫作家イサイアス・ヒメネス氏を囲み、オアハカ地方の動物木彫がどのように発展してきたかを学びます。イサイアスさんの木彫実演もご覧いただけます。
日時 3月16日(日)14時～15時45分(13時30分開場)
会場 本館2階第5セミナー室(定員70名)
講師 趣旨説明 鈴木紀(本館 教授)
イサイアス・ヒメネス(木彫作家)



お問い合わせ先
本館研究協力課 研究協力係
06-6878-8209
minpakutenka@minpaku.ac.jp

※詳細は二次元コード
(QR)からご確認ください。
※手話通訳あり



日時 3月21日(金)18時30分～21時(17時30分開場)
会場 オールホール(大阪)
(定員480名)
趣旨説明 吉田憲司(本館 館長)
司会 飯田卓(本館 教授)
主催 国立民族学博物館、毎日新聞社
【申込期間】3月11日(火)まで
※事前申込制、先着順、参加無料
※オンライン(ライブ配信)でもご参加いただけます。

ジャガンナート神

標本番号 | H0173504

地域 | インド オディシャ州 プリー市

展示場 | 南アジア



★ 推しコレポイント ★

兄妹は色白なのに、真っ黒な肌と大きな目！ 一瞥（いちべつ）で「なんじゃこりゃ！」と惹きつけられる姿は唯一無二です。



推しコレ図鑑

かわいさと、畏ろしさと、ジャガンナート

すがせ あきこ
菅瀬 晶子 民博 准教授

大人気のジャガンナート様

真っ黒な顔に大きな目玉、(たぶん)にっこり笑った口元、前に突き出た棒のような腕。とことん身体のパーツが簡略化された二頭身のその姿は、まるでマスコットのように愛らしく、肉感的な神々が並ぶ南アジア展示では、強烈な異彩を放つ。その名はジャガンナート、インド東部のオディシャ州で崇められる神だ。

どうしてこんなにほかの神々と姿が違うのか。その理由は、この神がもとはオディシャ州の部族神であったことにあるようだ。おそらくあまりに人気があったため、後発のヒンドゥー教にとり込まれたのだろう。ヒンドゥー教のトップスターであるクリシュナと同一視されているのだから、ただものではない。わたしが研究しているキリスト教の殉教者聖ゲオルギオスも、パレスチナの豊穡神バアルが一神教にとり込まれた姿だといわれている。そういう意味でも、ジャガンナート様にはとても親近感がわくし、神像とは縁のない西アジア研究者としては、羨望すら感じてしまう。じつはみんな事務室内のロッカーには、笑顔いっぱいのジャガンナート様のシールが貼られているのだが、これは30年ほど前にインドの特別展示がおこなわれたとき、ジャガンナート様のご尊顔をあしらったシールを広告目的で作った名残なのだそう。



ロッカーに貼られたジャガンナート様のシール(2025年)

山車に飛び込み轢死する信徒も

ところが、かわいらしい見た目に反して、彼は犠牲を欲する神だという説がある。夏にプリーでおこなわれる大祭では、ジャガンナートとその兄妹神を載せた巨大な山車が練り歩くのだが、13~14世紀のフランシスコ会の宣教師が、救済を求めて山車に飛び込み轢死する信徒がいると記録しているのである。そのいっぽうで、しばしば菜食主義の守護者とされる一面もあるようで、いくつかの菜食専門料理店で、彼が兄妹神と一緒に祀られているのを見たことがある。

ヨガ教師だった友人は言う。「かわいいけど、なんだか話を通じなさそうなんだよね。話しかけても『ア!』とか『オ!』とか言われそう」。かわいいだけじゃないからこそ、人はジャガンナート様に惹かれるのであろう。

みんぱくの大先輩に圧倒される

テルメズ考古学博物館 (ウズベキスタン スルハンダリヤ州 テルメズ市)

くろだ けんじ
黒田 賢治 民博 助教

アフガニスタン国境を目前にしたテルメズ市の中心には、二〇〇一年に設立された考古学博物館がある。正面の入り口周辺は幾何学文様のモザイクタイルで彩られ、改修を経た方形の土色の建物には、ターコイズブルーのドームが三つ掲げられている。モスクか神学校に見えるが、しっかりと正面の壁に「考古学博物館」とウズベク語で書かれている。

一階と二階の展示場には、テルメズ近郊で発掘されたさまざまな時代の考古遺物が陳列されている。『西遊記』の三蔵法師のモデルともなった唐の玄奘三蔵げんじょうさんざうが訪れたときにそうであったように、仏教都市として栄えた時代があった。またイスラーム到来以降の貨幣や陶器の破片なども展示され、テルメズの長い歴史を知ることができる。そんな展示場の一角で筆者の目に飛び込んだできたのは、「加藤九祚展示室」である。

加藤九祚民博名誉教授（一九二二～二〇一六年）は、みんぱくの中央アジア研究の礎を築いた人類学者である。退官後はウズベキスタン科学アカデミー考古学研究所と共同で、テルメズ近郊のカラ・テパなどの仏教遺跡を発掘したことも知られている。



考古学博物館の外観(テルメズ市、2024年)



上:カラ・テパの仏教遺跡。トタン屋根は遺跡保護のため加藤先生が私財を投じて建設した(テルメズ市郊外、2024年)



下:故加藤九祚民博名誉教授の紹介パネルと著作など(テルメズ市、2024年)

「加藤九祚展示室」と記され、肖像や発掘風景などの写真が壁に飾られている堂々たる入り口。展示室のなかに入ると、加藤先生がかかわった発掘調査で出土した資料などが陳列されている。加藤先生の紹介パネルは最奥にある。その前におかれた展示ケースのなかには、先生の著作とともに、テルメズ名誉市民として贈られた表彰状もあった。

加藤先生のような、調査地でも愛される研究者に筆者は到底なれないだろう。みんぱくの五〇年の歴史のなかにいた先人に、ただただ圧倒されるばかりであった。

テルメズ駅より徒歩約10分。市内中心部に向かう道路沿いにありアクセスもしやすい。
テルメズ考古学博物館公式サイト <https://stam.uz/>

ロシアは広すぎる

ふじわらじゅんこ
藤原潤子

神戸市外国語大学 准教授
かけはし出版代表

ロシアでのフィールドワークでは、いつも移動に苦労する。国土が広いため、移動距離が長くなるが、まったく予定通りにはいかない。例えば列車はしょっちゅう遅れるので、乗り継ぎの列車に間に合わず、駅で夜を明かすはめになったりする。

車での移動も道が悪くてつらい。車がはねた拍子に、天井に頭を思いっきりぶつけることもあるし、車が横転しかけて、首の骨を折るのではと思ったこともある。ロシアでは冬に凍った川を道路として使う地域があり、あんがい普通の道より快適なのだが、この場合の問題はトイレ休憩である。

陸を走っているときなら、森に入って隠れられるが、シベリアを流れる雄大な川の上は、あまりに遮るものがなさすぎて困った。飛行機に関しては、地方都市と村落部を結ぶ十数人乗りの飛行機だと、フライトスケジュールはあつてなきがごとし。空港に

電話しても通じず、いつ飛ぶのかはウワサでしかわからなかったりする。荷造りを済ませて、いつでも出発できる状態にしておき、「飛ぶぞー」というウワサを聞きつけた瞬間に、荷物をひつつかんで、全速力で空港に走らなければならない。切符を持っていても、本当に乗れるかどうかは飛び乗るまでわからない、というじつにスリルに満ちた旅になる。

湖が点在する地域では船での移動が必要になるが、チャーターした船の船長がなぜか来なくて、一日中待ち続けたこともあった。後からわかったことだが、船長は酒を飲んで寝ていたらしい。ロシアではよくある話である。モーターボートで移動するとき、ひどい悪天候に見舞われて、死ぬか



来ない船を待ちくたびて寝ている、筆者の共同研究者(ロシア カレリア共和国、2002年)



シベリアの大河レナ川の上で(ロシア サハ共和国、2008年)

と思ったこともある。山のようにうねる大波に乗り上げては、宙に浮いてドンッと落ち、また乗り上げては、ドンッと落ちるので、衝撃で内臓が痛かった。湖での溺死事故や、溺死者に呪われた話をさんざん聞いた後だったこともあり、本当に怖かった。

そんなこんなでロシアでの移動は大変だが、二〇二二年にウクライナ戦争が始まったからは、そもそもロシアに行くこと自体が難しくなってしまった。早く平和がもどって、面倒ながらも楽しいロシアに、また行ける日が来ることを願っている。

だって
調査だもの

おなかと背中がくっつきながら

工藤 さくら 民博 特任助教

ネパール社会のケガレ観念

わたしはネパールのネワールという人びとの儀礼文化を研究している。少しややこしい話になるが、ネワール社会には仏教徒であれヒン

ドゥー教徒であれカーストの考えがあつて、良くも悪くもそれが社会を機能させている側面がある。カーストの考えにはケガレは伝染するという観念があるため、儀礼をおこなう当事者の関心は、沐浴や断食などをとおして身体的・性質

な(モジュ「触れられない」)状態とされ、四日目に沐浴をするまで、台所で火を使うことや儀礼の聖所に入ること、寺院の参拝などができない。当然、わたしもその禁忌を守って生活するようにしている。しかし調査期間には有限だ。

あるとき、生理が来そうだとわかつていながら、どうしても見たい儀礼の時期がやってきた。しれっと参加するつもりで日程を確認していると、姉と慕う女性から「五日後だとあなたの生理が始まるわね、儀礼が終わるまで部屋に来ちゃいけないからね」とピシヤリ。それが見たかったのに。しかし数秒後には、すみませんという気持ちにさせられる。それほどに儀礼は、真剣勝負なのだ。儀礼を完璧に遂行するため、そして

その間、裏方で働くことができる親族を確保しておくという実務的な理由もあり、女性は他人の生理のタイミングをよく把握している。

食べたらケガレる

ケガレは食事を摂ることで蓄積される。朝起きて沐浴をした直後が一日のうちもっとも清浄とされ、食事を口にするごとにケガレがたまっていくと考えられている。そのため、



儀礼前、祭司の朗読に合わせて沐浴する(カトマンズ、2013年)

儀礼は真剣勝負

女性は月経中は不浄

重要な祭祀は早朝から始まることが多い。どれほど早朝かという点、ある日の男児の人生儀礼では、午前五時、親族が家に集まってくる。六

時半、床屋カーストが来て住人の浄化をおこなう、時を同じくして祭司が到着する。七時、コミュニティの人たちが直会の準備を始め……。外の宴会場で、蒸留酒や

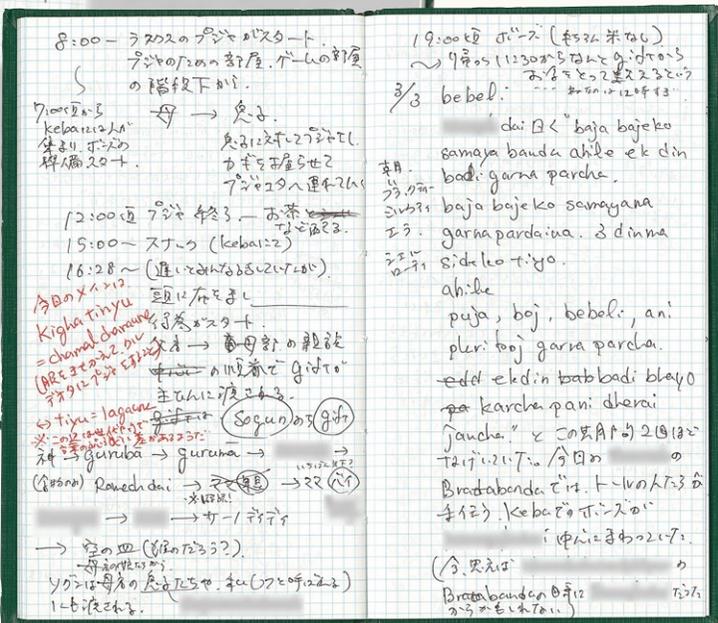


死者供養の儀礼の様子(カトマンズ、2013年)

よ」と声をかけられるが、過去にそれを口にしてしまい儀礼部屋に居られなくなった失敗があり、頑なに断る癖がついてしまっている。

午前10時、すでに限界だ。お腹と背中がくっつくぞとはよく言ったものだ、完全にくっついていて感覚がある。

結局、このときの儀礼が終わるのは午後0時過ぎで、そのころにはもう空腹が限界をとうに超えて、なにか研ぎ澄まされたように覚醒してしまっているのがあった。



儀礼中に食事をした人がいたと知り愕然としているとき。空腹で生気がない筆跡なりにもカースト間のやり取りについて大事な内容を書き取っている(左)。空腹での調査に慣れたころのノート。聞き取ったネパール語やネパール語はアルファベットで書き残す(右)(カトマンズ、2013年)

タバコをのみながら水牛の肉を切ったり、豆を煮はじめたころ、祭祀をおこなう部屋で待っているわたしは睡眠不足と空腹でくらくらしている。「明日は早いわよ」と言われて床にいたのも束の間、深夜二時半に同室の姉が起き出して準備を始めたために目が覚めてしまい、そこからずっと断食である。祭祀は午前八時に始まったばかり。しかし何かを口にするわけにはいかない。ときおり、「ププ(母方のおばさん、ここではわたしのこと)、お茶と軽食がある



年次祭事のため聖水を2日ばかりで取りに行く。沐浴し裸足のまま10キロメートルもの道のりを歩く(ラリトプール、2014年)



とまらないラムヤイ

おがわ えみ こ
小川 絵美子

東京外国語大学 ジュニア・フェロー

見た目は小粒の新ジャガイモのよう。日本語ではリュウガン(竜眼)とよぶ。といっても、日本では食べたことも見たこともなく、わたしはタイではじめてその果物を知った。ラムヤイという、茶色い皮に包まれたゼリー状の果肉をもつ果物。チェンマイはその主要な産地であり、わたしがはじめて訪れたのがちょうど旬に当たる8月だった。そして、あとで知ったことだが、その年は特に豊作だったらしい。会う人誰からもラムヤイを勧められた。おかげで年月が経った今でもわたしにとってフィールドの味は、何を食べてもこのラムヤイなのである。

大学のフィールドトリップでタイ人の学生と一緒に遺跡を見学していたときのことだ。野生のラムヤイが目に入り、もしかしたら届くのではないかと思わず手を伸ばした。近くを通りがかった男性から、「なにをしてるんだ」との声がかかり、咎められるかと慌てて手を引っ込めたが、「こうやって穫るんだよ」と、その人は二股の枝を拾い上げ、器用に枝を手繰り寄せると、あっという間にラムヤイを収穫してしまった。しかも、こちらが日本の学生が交ざっている団体だということを知ると、もてなしのつもりなのか、「もっと持ってけ」と張り切り、わたしたちが遺跡の見学をしているあいだにも周囲の木々からさらに収穫。いつの間にか別の通行人や、見学に飽きた学生もそこに加わり、遺跡見学はラムヤイ狩りと化した。「遠慮するな」と男性は得意げに笑っていたが、地元住民だった

としても、遺跡は彼の庭ではあるまいに……。

結局ありがたく頂戴した山盛りのラムヤイは、帰りのバス車内でも食べきれず、寮に戻ってから車座になってみんなで食べ続けた。「一生分食べたかも」などとうそぶいたが、今にして思えば序の口だった。

以来、フィールドで何度もラムヤイと再会し、たらふく食べてきた。パイナップルやスイカなどは一食分のカットを屋台で買うこともできるが、ラムヤイはキロ売りが基本。分け合う人との思い出も増えた。



鈴なりに実をつけるラムヤイは、枝ごと束ねて量り売りされる。写真は格安で有名な学内の市場のもので、1キログラム20パーツほど(当時約70円)で売られていた(タイ チェンマイ、2018年8月)

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 山中由里子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 中川理 奈良雅史 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 研文社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係
にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくりられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

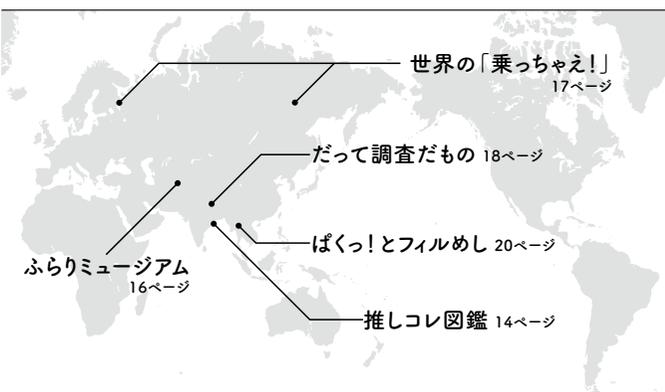
電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会

今月号の地図



編集後記

工藤さくらさんの記事で、ネワール社会で血のケガレ観念が今でも強く意識されているようですが、なんだか新鮮だった。日本の都市生活で血や死のケガレを意識させられることなどほとんどなく、今はそんなの迷信だと無視しようと思えばできるからだ。瀬戸山玄さんの「巻頭エッセイ」でも、死のケガレの観念よりむしろ肉体の腐敗や屍臭^{しじゅう}を防ぐ冷凍技術の進歩の方が印象的であった。科学への信頼は血や死のケガレの観念を駆逐してしまうのだろうか。

いっぽう過度の科学主義は、文化人類学のような

人文学と相容れない。カミさまに関する

ウワサ話なんかわたしは気になる。

世界の人口は増える一方、なのに

価値観は画一化する一方、なんて

のは奇妙だ。

吉田憲司館長は今月退任されます。

8年間お疲れ様でした。(樫永真佐夫)



2025年2月号において誤りがありました。下記のとおり訂正いたします。

- | | |
|---------------------------------|----------------------------|
| 6頁 誤)「クルアーン第28章78~82節」 | 正)「クルアーン第26章78~82節」 |
| 10頁 誤) العدل 秩序 النظام 正義 | 正) العدل 正義 النظام 秩序 |
| 11頁 誤)『アル=マディーナ紙』(1974年1月7日) | 正)『アル=マディーナ紙』(1974年4月7日) |
| 21頁 誤)「今月号の地図」 <u>ぷらりミュージアム</u> | 正)「今月号の地図」 <u>もっと、みんぱく</u> |

次号の予告 4月号

特集「文化は誰のもの?」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

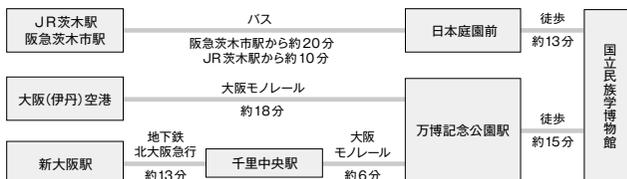
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 一般 580円/大学生 250円/高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>

